昭和文学研究　第43集（抜刷）
二〇〇一年（平成十三年）九月一日発行

二重化のナラティヴ

――三島由紀夫『美しい星』と一九六〇年代の状況論――

山崎義光

二重化のナラティヴ

――三島由紀夫『美しい星』と一九六〇年代の状況論――

山崎　義光

一　はじめに

『美しい星』（『新潮』昭和三七〈一九六二〉・一～一一）は、核戦争による人類絶滅の危機を救う使命をになった宇宙人であるという自覚をもつ人物たちを形象化することで、冷戦時代の観念構造を描出した小説である。米ソ冷戦対立は、資本主義と社会主義とのイデオロギー対決が、核装備の競争としてあらそわれ、地球規模での両陣営への二極化を生み、敵対関係を激化させた。しかし、核の破壊力の大きさは、双方の地盤をも揺るがすことになるために、敵味方という構図自体を内破する。そうした武力行使の限界状況において、アメリカは軍事的拮抗とは別次元で、豊かな社会を約束することをアピールする戦略で社会主義陣営と対抗する。そのことを象徴的に提示した一コマが、一九五九（昭三十四）年、モスクワをおとずれたニクソンとフルシチョフとの「台所論争」である。[1] ニクソンは、「豊か」で「幸福」な生活を可能にする資本主義社会のイメージをアピールすることで、平和的な豊かさが資本主義社会で実現可能であることを示し、資本主義体制の優位を主張した。すなわち、〈幸福な家族〉という戦略である。こうしたアメリカの戦略の背景には、第二次世界大戦時、すでに生産主導の社会から消費主導の社会への変容をとげていた状況がある。日本においても、戦後一九五〇年代から、政治的には五五年体制が確立し、生活の次元においては、〈郊外〉化が急速に進み、アメリカの後を追いかけるように、豊かな暮らし、〈幸福な家族〉が国民生活を方向づけるようになる。六〇年代には「レジャー」や「余暇」といった語が新聞雑誌に頻出するようになる。だが、核の傘の下で相対的に安定した世界での、自由で物質的に豊かな社会への発展は、文化的な意味が過剰に提供され、あらゆる面での選択可能性が増大することで、逆に、特権的な意味を見いだせないという実存を脅かす新たな事態に反転することにもなる。地域共同体の解体と表裏をなして〈郊外〉化が進行し、幸福な家族という幻想が広がる一方で、そうした幻想が幻想に過ぎないという幻滅も同時に生まれてくる。三浦展は、主婦症候群や、若者の反乱が、〈郊外〉化にともなう平均化された家族幻想に一つの根をもつと指摘している。[2] 社会の不透明性の増大は、非

自明的な幻想による意味の充塡に固執することへとつながっていくのである。例えば、落合恵美子[3]によって家族の戦後史について指摘されているように、恋愛・結婚の自由は、多様性を生み出すよりも、まずは中流意識の平均化を進行させ、皆婚化・少子化・産児数の画一化という「再生産平等主義」と化して標準化し、サラリーマンと主婦の親に二～三人の子供という家族像が定着して、〈幸福な家族〉という幻想は暗黙の制度と化していくことになった。こうした状況は一九五〇年代から広がりはじめ、消費社会の発展とマイホーム幻想が定着し顕在化するのは一九七〇年代以降であると言われる。三島はすでに『幸福といふ病気の療法』（一九四九）で、〈幸福な家族〉幻想のはらむ屈折した意識の問題を多分に戯画化しながらではあるがいちはやく描いていた。[4] また、『鏡子の家』（一九五八）や大江健三郎『日常生活の冒険』（一九六三）など、この時期の小説にはしばしば意味に飢える実存の感触が形象化されている。

本稿で取りあげる『美しい星』もまた、こうした状況を背景とした小説である。意味の喪失感を抱えた人物たちが登場し、無意味と無為に浸された状態から一転して〝本来の〟宇宙人としての本質に目ざめ使命を自覚する人物たちが描かれる。だが、それはたんなる病理として第三者の視点から物語られるのではない。小説の〈語り〉は、登場人物によりそって叙述されるのだが、同時にアイロニックに相対化もされるという〝二重化のナラティヴ〟を有効に機能させ、物語世界に内在しながら世界を全体として対象化する登場人物（宇宙人）たちを呈示するのである。

『美しい星』発表当時、大岡昇平は「戦後文学は復活した」[5]（『群像』昭三八・一）において、この小説について次のように述べた。「『美しい星』において、人物は星から霊感を受けた宇宙人という垂直な構造を持っている。彼等の地球上の行動は任意となり、前半は少しそらぞらしいお話が続くが、宇宙人同志の論戦の場面に到って、それまで馬鹿みたいな動きをした主人公の思想が生動して来る」。この評に端的に示されているように、『美しい星』が言及される場合には、主に第八・九章の論争部分を中心として読まれ、現代社会批判として論じられるか、登場人物の特異性・胡散臭さに力点がおかれながら読まれるという二つの極の間を振幅している。前者に力点のおかれたものには、あとで触れる「政治と文学」論争を惹起した奥野健男の所論や、川島秀一[6]の論がある。後者に力点のおかれたものには、野口武彦の指摘や、ユング『空飛ぶ円盤』（一九五八）に依拠しながら、宇宙人であると思いこんだ地球人の物語として登場人物の精神病理を分析した矢吹省二[7]の論、登場人物の形象と聖書との関連を指摘した及川俊哉[8]の論などがある。しかし、『美しい星』について論じたものは、あまり積極的には、この小説の〝二重化のナラティヴ〟に言及してこなかった。野口武彦[9]は、作者はロマン派的心情の源泉としての憧憬が永遠に浮遊状態に漂うしかないことを知悉しているからこそ、「この「憧憬」はイロニイ、自分自身に対する皮肉を利かして、作中人物から身を引き離し、作品世界と密着せず、したがってそこに完璧な虚構を屹立させ、ただ虚構であることだけが支えている「美」を確保するのである。／しかし、『美しい星』の主人公たちをとら

える地球人であることの絶望感、人間であることの不幸は、やはり三島氏の心の叫びである」（／は本文改行）というように論じた。作者が作中人物と距離をおいているとしながらも、同時に主人公の叫びは三島の心の叫びでもあると読めてしまうのは、この小説のアイロニックな二重化のナラティヴに由来している。

本稿では、一九六〇年代の世界と実存の関係を、『美しい星』がどのような叙法で呈示したかを分析するとともに、この小説が惹起することとなった「政治と文学」論争と関連させながら、この小説が同時代の状況論に対してどのようなスタンスをもったかについて論じてみたい。

二　登場人物の形象——冷戦時代と実存の危機

前節に述べたような時代状況は、『美しい星』の大杉一家の形象にも反映している。東京まで電車で一時間の郊外である飯能市に住み、大杉重一郎は資産家であるため、物語の現在においては職に就いていないが、かつては大学を卒業して教鞭をとった男である。妻の伊余子は専業主婦であり、娘と息子の二人の子供がある。そして、郊外型家族の不安にひたされているかのようにも形象化されている。重一郎は、「目的もなく使命感もなかつた半生」を過ごし、生活の無為と無意味に悩まされており、妻の伊余子は家事に固執することで精神のバランスを保つ主婦である。暁子と一雄は平凡な学校生活をすごしつつ、それに満足していない。大杉一家は、典型的な〈幸福な家族〉でありながら、そうであるがゆえに、無為と倦怠と意味の喪失感に悩まされている。[10] ただし、吉本隆明[11]が指摘したように、「巨大社会のなかの孤立感や不安感や家庭の冷たい不和」としてよりも、「優越感と疎隔感が昂じ」ていくように描かれる。

社会の不透明性が増大し、共同的な幻想の共有の度合いが低下することで全体性というリアリティを喪失し、実存の意味が希薄化していくことから、逆に、世界を総体として破滅へ導く可能性、すなわち核戦争の可能性だけが全体性のリアリティを支えるという逆説が現れる。宇宙人の視点とは、そうした世界総体の破滅の可能性を対象化する視点である。ユング[12]は、UFOの目撃を、冷戦を背景とした心理現象として説明して、人類全体の存亡にかかわりかねない危険の可能性がもたらす不安と、無為・無意味の感覚が昂進し実存を脅かされることから、起死回生の幻想が到来すると説明づけた。『美しい星』の宇宙人も、そうした実存の危機意識から生まれてきたように形象化されている。こうした核のもたらす不安と実存の危機とでも呼ぶべき構図自体は、同時代的に共有されていた。

たとえば、『美しい星』に先立つ黒澤明監督の映画『生きものの記録』[13]（一九五五）に見ることができる。この作品では、核の不安に苛まれた工場経営者の主人公中島喜一が、息子の家族ら近親者を引き連れて南アメリカへ移住することを説くのだが、息子たちは誰一人従うものがなく、裁判によって父を準禁治産者にしようとする。興味深いのは、もはや移住が不可能であるとわかったときに八方ふさがりとなった主人公が最後の手段として自ら自分の工場に火を放ち、破局を演出してしまう点

である。しかも、狂気に陥った喜一は精神病院に入れられるが、そこで地球外の視点を獲得し、「その後地球はどうなりましたか」と言い、自分が地球外にいるような幻想に憑かれる点である。世界の全的な破局の可能性が閉塞的な内部を形成し、その内部に凝った不安が疎外されて地球外の視点を獲得するという点では、『美しい星』はこの映画と同工である。だが、『美しい星』は、この映画が終った地点からはじまっていると言えるだろう。

超越的宇宙人の到来によって地球の紛争が解決されるとともに、宇宙人の独占支配に隷属するという筋立てをもったSF小説に、アーサー・C・クラーク『幼年期の終り』（一九五三）がある。これをのちに三島は「小説とは何か」（『波』昭四三・五～四五・一一）で、「私の読んだおよそ百篇にあまるSFのうち、随一の傑作」と述べて興味深く紹介している。[14] 一方、人間そっくりの宇宙人を自称する人物が登場し、本当に宇宙人であるのか、人間であるのかをめぐって対話する、安部公房『使者』（昭三三）『（テレビドラマ）人間そっくり』（昭三三）が、『美しい星』に先だってある。後者はのちに、小説『人間そっくり』（昭四一）としても書かれることになる。安部公房のこれらの作品では、人間である登場人物の側が焦点化され、人間そっくりの火星人を自称する人物が一方的に語り、その事実性について検証不能な対話の場面で翻弄されることになる。これらに比して『美しい星』は、『幼年期の終り』のような地球の帰趨を知る超越的な視点としての宇宙人の存在を、形而下的にはまったく人間とかわらない、「人間そっくり」の宇宙人として登場させ、地球人の視点と宇宙人の視点とが、〝二重化のナラティヴ〟によってパラドキシカルな関係におかれながら、相殺あるいは相乗されるようにして構築されているといえるだろう。

三　二重化のナラティヴ

そうした二重化のナラティヴは、大杉重一郎が宇宙人として目覚める経緯が叙述されている箇所で、顕著に現れている。

何の努力もなく、何の実績もなしに、或る日かうして恩寵のやうな優越感がわがものになつてみると、重一郎は齢五十をこえてはじめて自分の使命ともいふべきものに目ざめた。目的もなく使命感もなかつた半生は自分の過誤といふよりも、宇宙的な真理がいつの日か彼を選んで使役するために、無疵のまま保存しておいてくれた未成の状態ではなかつたかと思はれた。

〔中略〕

A重一郎はこの世界に完全に統一感の欠けてゐることを見抜いてゐた。すべてはおそろしいほどばらばらだつた。すべての自動車のハンドルと車輪とはばらばらであり、すべての人間の脳髄と胃とはばらばらだつた。

〔中略〕

Bかうして重一郎が自分の苦しみの卑小と限定性とに徐々に気づき、自分の思ひ上りを恥ぢるにいたつたとき、ふとした

機縁からロンドンで出版された「円盤の故郷」といふ本を読んだのである。

〔中略〕

重一郎はこの本を読むうちに、円盤の搭乗者は他の遊星の住人であることを疑はないやうになつた。それ以来彼は円盤に関する本で入手できる限りのものを渉猟し、円盤の研究に憑かれたやうになつた。従順で知的な家族は、家長の本を廻し読みにして、日頃の話題も円盤や宇宙人のことばかりになつた。

Cかうして去年の夏の忘れがたい事件が、まづ重一郎の上に起ることになつたのである。

〔中略〕

まづ彼は、円盤が目に見えてゐたあひだの数秒間に、彼の心を充たしてゐた至福の感じを反芻した。それはまぎれもなく、ばらばらな世界が瞬時にして医やされて、澄明な諸和と統一感に達したと感じることの至福であつた。天の糊がたちまちにして砕かれた断片をつなぎ合はせ、世界はふたたび水晶の円球のやうな無疵の平和に身を休めてゐた。人々の心は通じ合ひ、争ひは熄み、すべてがあの瀕死の息づかひから、整つたやすらかな呼吸に戻つた。……

〔中略〕

『俺の記憶の源はたしかにあそこにある』と重一郎は考へた。今まではただその事実から目を覆はれてゐただけであつたのだ。

その瞬間に彼は確信した。彼は決して地球人ではなく、先程の円盤に乗つて、火星からこの地球の危機を救ふために派遣された者なのだと。（第一章一四―一七～二五　文中に付したA～Cは引用者）

A「世界に完全に統一感の欠けてゐること」を感じていた重一郎が、B空飛ぶ円盤への関心を持つようになり、C円盤の目撃に到る。目撃の瞬間に「澄明な諸和と統一感」を体験し、それが、かつてどこかで「このやうな世界をわが目で見てをり、そののちそれを失つたのだ」というあるべき記憶へと結びつき、記憶の源として「火星」世界の住人であったという確信にいたりつく。かつての無為の状態は、「目的もなく使命感もなかつた半生は自分の過誤といふよりも、宇宙的な真理がいつの日か彼を選んで使役するために、無疵のまま保存しておいてくれた未成の状態」であったというように物語られている。

しかし、A～Cの叙述は、矢吹省二[15]が論じたように、A世界の統一感と意味の欠如に打ちのめされた地球人の自我が、B宇宙人の存在の可能性を知り、C自我の統一性の欠損の苦痛を天空に投影して円盤の幻を描き、それを火星へ結びつけて自らを火星人と思いこんだ、精神病理の発症の結果であるとも読める。

『美しい星』は、物語世界に人物として登場することのない物語世界外に位置する語りの座から物語られるが、第三者的な地位からの介入はおさえられ、登場人物を不定的に焦点化し、使命を担った宇宙人であるという確信にいたった人物たちの思考をなぞるようにして呈示される。それによって、登場人物たちの意味の欠如感とともに、突如あらわれた啓示としてUFO

出現の経緯が語られる。しかしながら、他方で、戯画的な形象化や、脇役的人物の視座を用意すること等によって、アイロニックに地球人にすぎないことが含意される。それゆえ、物語られている登場人物の視点と、それを受け取る読み手の視点とで、二重化された異なる意味を派生する物語の叙法（ナラティヴ）が採られている。

超越的な次元から明示的には物語られることのないこのような叙法は、世界を鳥瞰的な第三者の立場から意味づける視座がなく、各々の視点に相対的な優劣しかありえないことを前景化する。そして、そのことの逆説的な結果として、自らの視点こそが全体を鳥瞰する特権的な視点であると主張された場合に、それに対して、絶対的に超越的な批判を加えることが不可能であるという事態を顕在化させることになる。大杉一家は、地球を宇宙から観望しその滅亡を鳥瞰する宇宙人であると自覚するが、それが常識的に見ていかに荒唐無稽であろうとも、そうした自覚を絶対的な根拠をもって批判することはできないという、共約不能性を露呈させるのである。

具体的には、大杉一家のもつ概念枠とそれ以外の人々との間での共約不能性が問題となる。宇宙人であるという確信が世間で容易に受け入れられるものではないことを自覚する大杉一家の人たちは、自分たちが宇宙人であることを隠すことに腐心する。「信じる者同士の口調で語ってはだめなのだ。人間にはあくまで人間の論理と心理に従ってものを言ってやらねばならん」（第二章一四―三七）のである。そうして彼らは、実は宇宙人であるが、「人間の論理と心理」をよそおった仮の立場から語り振る舞うことになる。

それに対して、大杉一家をやっかむ雑貨店村田屋のおかみさんや少年店員、重一郎の話を無視する同窓生ら（第二章）の視点は、それぞれ、金持ちに対するルサンチマンや、通俗的な際限のないおしゃべりによって共有される共同性に根ざしていることが描出される。これらの人物たちの大杉一家に対する思いなしや応接は、「庶民」であること（村田屋）、あるいは社会的な地位と生活知識の無底的なおしゃべりを共有し、共有される話型を逸脱しない範囲で語り思考する姿（同窓生）として描かれる。こうした人物たちは、社会的カテゴリーにおさまる振る舞いの作法に従い、そのことに疑念をもたない限りにおいて、大杉家の人物たちと異なるに過ぎない。雑貨屋のおかみや同窓生らが、「万年助教授」と「床屋」と「銀行員」の三人組羽黒一派とよく似ていることは、誰もが宇宙人へと反転する可能性のあることを示している。羽黒ら三人は、同時に円盤を目撃するという共有された体験にもとづいた確信と、この確信に基づいた地球の滅亡というおしゃべりの主題を共有した小さな社会性を有して成りたっている点で、村田屋や同窓生ら「人間」のネガであるといえるだろう。大杉一家を訪ねてくる「公安警察」（第四章）や、暁子を妊娠と診断する「医者」（第六章）、「核実験反対会議の委員」の「かなり名のある学者」（第六章）、重一郎をガンであると診断する「医者」（第十章）らもまた、社会的権威を背景とした制度や知に準拠しているがゆえに、彼らの言葉が信憑性をもつに過ぎず、絶対的究極の根拠をもつわけではない。大杉一家を、宇宙人であると倒錯的に確信しただ

けの地球人であるとみなすことは、精神病理として診断している「医者」と同様の視点に準拠していることになる。しかし、絶対的な根拠をもたない点では、宇宙人の観点と「人間の心理と論理」は共約不能ながら等価である。大杉一家の宇宙人の自覚は、肉体的には全く人間でありながら魂だけが宇宙人であり、形而下的条件としては全く根拠のない確信であるがゆえに、逆に、彼らの言葉は決して覆されることのない絶対的な言葉たりうる。同じことを地球人の視点からみれば、全くのナンセンスになる。

そうした地球人の視点と宇宙人の視点の共約不能性に対して、宇宙人同志の遭遇は、相乗的に宇宙人の存在を〝事実〟の域におしあげ、概念枠を共有した対話を可能にする。そうしたことを示す挿話が、暁子と竹宮との挿話（第三章）と、大杉重一郎と羽黒一派の論争（第八～九章）である。

暁子と竹宮の挿話は、暁子に焦点化され、金星人同志の出会いとして語られる。しかし、のちに暁子が妊娠していることが発覚し、重一郎が調べたところでは、竹宮が女たらしですでに失踪していることがわかる（第六章）。結果としてその正体が何者であったかは判然としない。だが、暁子との場面においては、竹宮は自分が金星人であることを前提として、すなわち暁子と概念枠を共有して対話している。竹宮の存在は、宇宙人であることと、人間であることとの違いが、共有されることば（概念枠）によって条件付けられていることを明かしている。

重一郎と羽黒一派との論争の挿話では、まず、一雄が黒木・羽黒らと、重一郎の正体をめぐる対話を交わす。そのとき、「宇宙人といふ言葉は、一切の可笑しさを拭ひ去られて、とてつもない奇妙な高い地位を與へられ」（第八章一四―二〇九）る。重一郎と羽黒一派は、無責任な宇宙人の立場から見た地球の未来という主題を共有しており、滅亡の未来を予想している点でも共通の了解をもっている。両者の違いは、「人間をどうすべきか」について、重一郎が地球を救うために人間を擁護しようとし、羽黒らは滅亡させようとしている点である。主要な論点は、人間の時間的性格に対する信頼と不信の違いに求められる。大杉一家に訪れた宇宙人としての自覚は、地球救済の使命として自覚され、その戦略は人間に滅亡の幻影を見させることで、世界の全体性と実存の特権的な意味を回復させることである。そのためには、想像力に訴え、破滅の事前において事後の幻影を見させることだという。それに対して、羽黒一派は、破滅は確実なのだからすぐにでも全的に破滅させてしまえという。大杉重一郎は地球人の内在的な視点によりそい、破滅を避けさせるべきだと主張するのに対して、羽黒は終末を見越した視点からはやく終末を与えるべきであると主張しているのである。両者の対話は、無当責な立場であることにおいて共通し、地球人に対して憐れみを垂れるべきか、一刻もはやい滅亡を与えるべきかで争われる。ここでの対話は、地球人の視点を離れることにおいて可能になっているために、地球人の内在的視点によりそおうとする重一郎の立場は悪くなる。それゆえ、対話は、羽黒一派に圧倒されたかたちで終る。

大杉一家の宇宙人としての確信は、暁子の妊娠が竹宮の種によるものであることが重一郎から暁子へ告げられ、また暁子から重一郎の病がガンであることが告知されて、形而下的にはまったく人間であることが思い知らされることになる。だが、そうして地球人のことばで理解された形而下的な根拠をすっかり剝奪されたときにこそ、完全に人間の言葉で理解しうる形而下的条件には依拠しない、宇宙人であることの純粋な確信に到達することになる。

小説の最後は、重一郎に宇宙人からの啓示がおとずれ、円盤が到来するところで終る。暁子に指呼される円盤の出現は、暁子の金沢での挿話がそうであったように、物語世界内的な〝事実〟と言い得るかどうか疑わしく、大杉一家にのみ目撃されている円盤は錯覚にすぎないということもできる。が、「円丘の叢林に身を隠し、やや斜めに着陸してゐる銀灰色の円盤が、息づくやうに、緑いろに、又あざやかな橙いろに、かはるがはるその下辺の光りの色を変へてゐるのが眺められた」（第十章一四―二九八）という具体的な描写には、それがたんなる幻影であるとも事実であるとも付け加えられない。観点によっては不在の幻影ともとれるが、テクストには歴々とその存在が呈示される。円盤の存在は、二重化のナラティヴが機能して共約不能な二つの観点が言葉による形象として統合され、パラドキシカルに存在しているのである。[16]

四　「政治と文学」論争との関連

『美しい星』は、奥野健男によって「「政治と文学」理論の破産」（『文藝』昭三八・六）を宣告する小説としてとりあげられ、主に武井昭夫との間に論争が交わされた。論争は、「政治」的理論に従属した手段として「文学」を捉える「政治と文学」理論が失効したとする奥野の主張に対して、武井昭夫が、「「政治の優位性」論にみちびかれたプロレタリア文学や、「近代文学」派の「政治と文学理論」と結びついた戦後派文学を、擁護する気などはさらさらない」が、「新しい大衆的な「思想としての文学」を創造しようというのが、今日の文学運動の課題」であり、「「文学は人民の幸福のため、革命のため直接（つまり、なにかを媒体とすることでその支配を受けるということなしに）奉仕すべきである（つまり、自立的責任をもつ）という考え」は、この課題追求のなかで、抜くことのできぬひとつの命題として貫かれねばならぬ」と反論した（「日本文学　六月の状況―戦後文学批判の行方―」『週刊読書人』昭三八・五／二〇）。武井は一方で、「日共官僚」を批判し（「文学運動は誰のものか―『文学と文学運動の諸問題』への批判―」『新日本文学』昭三八・八）、それに対して、津田孝（「現代文学における反動的潮流」『文化評論』昭三八・九）が、サイデンステッカー・奥野健男・磯田光一・武井昭夫らをすべてひっくるめてプチブル反動批評家として批判するといったように、多くの論者を巻き込んでたたかわされた。

この論争において重要なのは、「政治と文学」理論の有効性云々の問題よりも、奥野が指摘していた、大衆消費社会化を前提とした「現代の人間疎外状況」という認識の方である。「世界の総体をとらえる、状況の本質をつかまえるという使命感、目的意識はあっても、具体的な手がかりは何もないのだ。（中

略〕文学者の内部世界に、世界の全体像はイメージを結ばない。〔中略〕現代の疎外状況下では、文学は世界と人間の関係を、統一的全体的に表現することができなくなったのか」（「純文学は可能か」『文藝』昭三八・一）。こうした認識ゆえに、政治理念によって硬直化したリアリズムの方法が無効化しているというのが奥野の論点であった。

吉本隆明は、奥野の立場を「戦前の作家同盟の解体期における徳永直の「創作方法上の新転換」と同じような意味を荷っている」（「「政治と文学」なんてものはない」『週刊読書人』昭三八・九／二）と指摘したが、奥野の状況認識は、「現代の人間疎外状況」を「歴史的偶然」とも述べているように、偶然文学論の中河與一や「純粋小説論」の横光利一の主張（昭一〇）と、状況認識の根幹において近似している。戦前の「政治と文学」論争においても、その背景には、大衆社会化が念頭におかれており、そうした情況において、どう大衆をつかむかといった前衛の側の戦略が問題を構成していた。このプロレタリア文学派の文学大衆化論争[17]にからんで、中河や横光による形式主義論争が惹起され、数年後には、その発展として中河が偶然文学論を、横光が純粋小説論を提起していた。そこで論じられたのも、社会の大衆化、複雑性の増大に見合った理解枠組みの必要性、小説の方法の主張であった。奥野が論争を惹起した当時も、それと平行するように、大岡昇平「大衆文化論をただす」（『中央公論』昭三八・三）をきっかけとした大衆文化論争[18]が起こっており、大衆論への関心は一般に高まっていた。このように捉えれば、奥野の主張は大筋において偶然論・純粋小説論の戦後における反復であると見做すことができる。

奥野は、「現代の人間疎外状況」といった認識から、「政治と文学」理論批判に先だって、「家庭」の崩壊について論じている。当時発表されていた、島尾敏雄『死の棘』、庄野潤三『静物』（昭三五）、吉行淳之介『闇の中の祝祭』（昭三六）、安岡章太郎『海辺の光景』（昭三四）『家族団欒図』（昭三六）等々は、「家」への反逆ではなく、「家庭」への幻滅を描いていると指摘した（「「家庭」の崩壊と文学的意味」『文学界』昭三八・四、「「家庭」文学の逆襲」『読売新聞』昭三八・五／七、八）。「人間疎外が深まり、世界全体の目標が見えなくなった現代において「家庭」だけが、理想境であるはずがない。けれど世界が見えない時、身近な「家庭」の本質を明らかにすることは、世界を明らかにする、逆転の支点になりうるかもしれない」（「「家庭」文学の逆襲」）と述べている。奥野は、世界の全体像、未来像を描き得ない「現代の人間疎外状況」を論じる角度から、現代小説における「家庭」の崩壊を描く傾向に言及し、その延長線上で、「政治と文学」理論の批判を展開している。「政治と文学」論争において交わされた論点よりも、以上のような大衆消費社会化を踏まえた状況認識との関連で、奥野が『美しい星』を見いだした意義を理解しておくことが重要である。奥野は「「政治と文学」理論の破産」でも、こう述べる。「現代社会は、十九世紀的思考による歴史的必然につらぬかれている世界ではなく、歴史的偶然に、予測できない事故に満ちている世界なのだ。世界は個人の内的精神にかかわりない動きをしめす。近代においては、成立していた内部世界と外部の現実との照応

はなくなり、深い断絶が生じた。外部の、現実社会のできごとを、いちいち精神的価値、論理的な意味をつけて考えることができなくなった」。それゆえに、小説において主人公の行動や思想を、その人間の内部世界の必然性と、外部の現実社会の必然性の両面から描こうとすると、チグハグなものになってしまう。その例が、野間宏『地の翼』『さいころの空』『わが塔はそこに立つ』などの作品だとする。奥野は、こうした、外部の理論（政治）と内部の精神（文学）の間が決定的に断絶せざるをえない「現代の疎外状況下」ゆえに、「政治と文学」理論の失効を主張し、また、現代文学の課題がどこにあるかを指摘したのである。

以上のような奥野の「政治と文学」理論批判は、核の傘の下での平和な大衆消費社会化にともなう「現代の人間疎外状況」を前提として捉えるものであったといえる。それは、戦前の偶然論・純粋小説論と近似した観点である。だが、それゆえに、中河や横光らが「全体主義」や「民族」を見いだしていったように、〝疎外からの全体性の回復〟を文学の使命として論じることに帰結していく。「現代文学の使命は、作家の内的世界の自由な想像力と表現力により、疎外の中にいる人々に疎外のない世界を、人生を垣間見させ、人間本来の感動―全人間的な美を味わせることにあるのだ」とし、「全体小説」という理念に言及して「単に現代の人間や社会を総合的に全体としてとらえるというのではなく、疎外から脱した統一的な人間、統一的な社会を、想像のなかにとらえる、より本来的な方法を包含するならば、ぼくは全体小説をイコール純文学の小説的あらわれとして、その実現を願わずにはいられない。それは疎外状況を脱したユートピア小説も、疎外状況を極限化した反ユートピア小説も、人間の善と悪のつまり想像の可能性の極限までを含む」（「純文学は可能か」）と述べている。こうした観点から『美しい星』を高く評価するのだが、登場人物たちの観念的転倒とそれを前提とした論争場面との関係を、「現実意識の疎外の極点において、逆に現実の本質部分と交錯した」（「新しい政治小説」『文藝』昭三八・一二）ととらえつつも、人類の運命をめぐる論争場面に注視するあまり、そこでの議論を特化して、「人類や世界総体に、人間の本質に対し、真正面から取り組み、それを文学化した小説」という評価を導き、宇宙人としての自覚の由来は等閑にふされてしまう。

しかし、『美しい星』の登場人物らは、全体性の喪失感から生じた無意味感虚無感を疎外し alienate、それが宇宙人 alien の視点へ観念的に転倒されることで、核時代の世界の全体像について語りえたのであるとともに、逆に、そうして獲得された宇宙人の観点から人間の世界が疎外され、切実な問題であるよりも、憐れみの対象でしかなくなる。大杉重一郎にとって、「何とかやっていくさ、人間は」（第十章一四―二九四）というほどの問題でしかない。この小説は、そうした二重化した意味をつねに表裏の関係として派生させるナラティヴによって呈示するのであり、それぞれの視点は相対化される仕組みをもつ。それゆえ、〝疎外からの全体性の回復〟といったヴィジョンもまた内破されていたといえるだろう。

五　おわりに

『美しい星』が、政治との関連で提起した問題があるとすれば、むしろ宗教小説の性格を帯びたこの小説が、エスニック集団やカルト集団などの原理主義（ファンダメンタリズム）の登場を暗示し、国民国家を単位とする国内－国際秩序という政治の地平そのものの基盤としての近代化の諸価値をゆるがす可能性が、近代社会の内部から、それに対する外部の視点（宇宙人の視点）が生成して現れうることを原理的に捉えた点にあったといえるのではあるまいか。[19]『美しい星』の翌年には『午後の曳航』（昭三八）が出されている。刑罰を免れる十四歳未満の少年集団の視点は、法律による保護によって逆に法律の存立を脅かす外部としての少年という形象が生み出されるという逆説的な視点である。この少年の視点は、『美しい星』における、形而下的には全くの人間でありながら地上の法に対して外的な宇宙人という視点と類比的である。

『美しい星』は、閉塞的内部から疎外されて生じる外部的な視点の生成をえがき実存と世界の破局の可能性の問題にあいわたりつつ、他方でそうした問題を語る視点を相対化もする二重化のナラティヴの方法によってパラドキシカルな関係を呈示することで、一九六〇年代の状況論に超政治的なスタンスで対し、ポスト冷戦時代にこそより一層顕在化する状況を呈示していたといえるだろう。

注

（1）以下は、三浦展『「家族」と「幸福」の戦後史』（講談社現代新書一九九九・一二）、小田光雄『〈郊外〉の誕生と死』（青弓社一九九七・九）などを参考にした。

（2）三浦前掲書（1）「第五章　郊外への反乱」

（3）落合恵美子『新版　21世紀家族へ』（有斐閣一九九四・四／新版一九九七・一二）

（4）三島は、『三島由紀夫短篇全集2』（講談社　昭四〇・四）の「あとがき」（『全集』三二－一一）で、「「幸福……」〔注－「幸福という病気の療法」〕や「毒薬……」〔注－「毒薬の社会的効用について」〕には「美しい星」や「金閣寺」の、〔中略〕萌芽が見られる筈である」と述べている。

（5）引用は、『大岡昇平全集』第一六巻（筑摩書房一九九六・五）一二頁。

（6）川島秀一「「美しい星」－SFの遠近法」（『国文学』一九九三・五）

（7）矢吹省二「ある悲劇の分析－三島由紀夫『美しい星』考－」（『國學院大学紀要』一九八九・三）

（8）及川俊哉「三島由紀夫『美しい星』論－物語類型における『聖書』との関連について－」（『言文』四七　二〇〇〇・一）

（9）野口武彦『三島由紀夫の世界』（講談社一九六八・一二）二〇九～二一〇頁。

（10）社会の〈郊外〉化と三島の諸作品との関連を論じたものに、松山巌『都市という廃墟』（新潮社一九八八・七／ちくま文庫一九九三・六）がある。本書の「神々の花嫁たちの家」では、戦後の家族意識の変容を論じる中で、『美しい星』の大杉一家の家族意識に言及している。

（11）吉本隆明「宇宙フィクションについて」（『夏を越した映画』潮出版社一九八七・六）郊外の住宅地に住む平凡な技師の疎外感・孤独感・不安感が色濃く描き出されているとする映画『未知との遭遇』と比較しながら触れている。

（12）C・G・ユング『空飛ぶ円盤』（松代洋一訳　ちくま学芸文庫一九九三・五）

（13）黒澤明監督『生きものの記録』（一九五五　東宝）脚本＝黒澤明、橋本忍、小国英雄　出演＝三船敏郎、志村喬、千秋実、三好栄子、東野英治郎ほか

（14）ただし、『定本　三島由紀夫書誌』（島崎博・三島瑤子編　薔薇十字社一九七二・一）の蔵書目録には、昭和三九（一九六四）年四月刊行の『幼年期の終り』（福島正実訳　早川書房）があり、これを読んだとすれば、『美しい星』執筆後になる。

（15）矢吹前掲論文（7）

（16）中村三春「三島由紀夫小説構造論－パラドックスの変奏」（『国文学』二〇〇〇・九）は、三島の小説全般にわたる特徴として「言語が現実に対して行使しうる強度」を指摘している。

（17）拙論「形式主義論争の争点」（『日本文芸論稿』二三・二四合併号　一九九七・二）

（18）大岡昇平は、「大衆社会現象、あるいは大衆文化について、明確な像を持ちたいという希望」から、平野謙による純文学変質論をはじめとする大衆文学論や、一九五〇年代からの社会学系統の大衆社会論などの不徹底を問いただした。これに対して、針生一郎「大衆文化の二つの顔」（『中央公論』昭三八・五）など、いくつかの批判が出された。

（19）こうした観点に通じる論点は、磯田光一「新しい政治小説」（『日本読書新聞』昭三七〈一九六二〉・一一／『磯田光一著作集1』小沢書店一九九〇・六）にある。磯田は、「あたかも新興宗教の信者や狂信的なスターリン主義者にとって、日常の人間性が問題になりえないのと同じように、重一郎にとっても実生活はもはや影のようなものにすぎない」と述べ、この小説の描く「思想の現実性」には、「二〇世紀の本質的な無気味さがあるのではなかろうか」と評した。二〇世紀に発生した諸種の観念的暴力としてのテロリズムという巨視的観点から、三島の諸作品・諸活動に論及したものには、笠井潔『テロルの現象学』（作品社一九八四・五／ちくま学芸文庫一九九三・七）がある。とくに『美しい星』とカルト集団との関連については、松山巌前掲書（10）「神の花嫁たちの家」に指摘がある。また、三島の原理主義との関連については、松本健一『原理主義－ファンダメンタリズム』（風人社一九九二・九）が論及している。

〔附記〕

『美しい星』その他の三島のテキストの引用は『三島由紀夫全集』全三五巻補巻一（新潮社）を用い『全集』と略記した。また、引用の際に付した（〇〇－〇〇〇）の数字は『全集』の巻数と頁数である。引用に際しては、適宜旧字体を新字体に改めた。